

文化財 やまと

大和町文化財保護協会発行



七 鈴 五 獸 鏡

大正座の建設

会長 野田直治

大正時代から昭和時代にかけてわれわれの町には三つの劇場が相次いで建てられた。大正座、弥富公会堂、山田公会堂がそれである。

当時、八幡町には朝日座、八幡座（後に八幡劇場）があり、遅れて日吉劇場が建てられた。また白鳥には白鳥座があったが、戦後新しくスワン劇場が加わった。こうして郡内各劇場がそれぞれに特色ある演劇活動を展開した。

いま、私は当時の記録や先輩の談話を頼りとして、大正座建設の昔をしのび、往年の文化活動の跡をたどってみようと思う。

大正座が歌舞伎座式建築の晴姿をわれわれの前に現したのは、大正六年十二月十一日の初興行の時であった。当時の設計書にはだいたい次のように記されている。

(1) 劇場は徳永字ボタ上六七番地に垣見留之助所有の田地一七五坪（約五七七・五㎡）を借地して建てること。

(2) 劇場は間口七間、奥行一〇間半の二階建てかわらぶき、建坪

七三坪五合（二四二・五㎡）このほかに楽屋ひさし六坪（九・八㎡）で観客定員四一五人とする。このほか灯火は金属製ランプ（このころまだ電灯がなかった）観客席には琉球むしろを敷き詰める。警察官の臨監席は二階左側に設ける等の設計であった。これによって当時の芝居は警察官の監視の下で行われたことがわかる。

これより先、徳永の有志たちは集まって大要次のような建設規約を定めた。

(1) 劇場建築は各人の出資金と寄付金によって行うこと。
(2) 敷地借用料は一か年につき米三俵二斗とする。

(3) 出資金は一口金一〇円とする。
(4) 各人の所有する口数（株数）は徳永区民以外の者には売買することはできない。

(5) 建築落成までに要する人夫は出資者の平等負担とする。
(6) 鷺見源四郎を建設委員長とする。

当時の

以上の規約に見るように、大正座は徳永区民有志の共同経営であって、他地区の資本導入は禁止されたわけである。この規約の主旨に賛同して出資を申し出た者は三〇名で口数は七七株（七七〇円）であった。これは徳永の総戸数の約半数に当たると、うち二〇以上の出資者は二〇人で、最多は鷺見源四郎の二五株、これに次ぐ者は山内伊八の一〇株であった。この外、徳永には財力・声望において屈指の有力者があったが、鷺見村長とは所属政党を異にしていたため、最初のうち、大正座建設に加わらなかった。

それを予告する広告ビラが張り出されて人目を引いた。その店頭も今は姿の见られないものが多いが年配の人にはなつかしい店名もあるうかと思うので、次へ掲げる。

白鳥出口屋 河辺奥安 神路酒井兼五郎 島藤五郎 名皿部太郎左 万場（欠字）

（当日の招待客）初日に限り次の五氏が招待された。平野庄市 駐在所 病院 田中喜之助 加藤信次郎

（優待券配布） 渡辺末雄 平野庄市 加藤信次郎 畑佐菊松 山内石之助 岩崎金吉 加藤由松 加藤梅二郎 荻田春吉 岩本幸之助 清水吉造 河合一雄 駐在所 日置彦三郎 嶋野喜平 奥田嘉一 金子亀次郎 永谷常吉 日置音吉 青木鉄之助 永谷清吉 清水柳右エ門

大正座の建設は、大工・木挽・左官などの職人のほかは、ほとんど全部出資者の労役によって、行われた。木切り・運搬・敷地造りなどは請負師に渡すことなく、すべて出資者自身の人足によって行なったのである。もっとも人足賃は一応支払ったが、一日わずか一〇錢だった。いくら物価の安い時代でも最低の賃金で、徳永ではイブシン人足と同額だった。いうなれば勤労奉仕同様の人足賃であった。大正座建設は着工以来約一か年でようやく完成し、大正六年一月一日、めでたくこけら落とし（新築劇場の初興行）を行うことになった。郡内一七か所の店頭には

大正七年、第一次世界大戦が終ると八年九年は戦後の好景気で

大正座は黄金時代を迎えた。地元
の若者たちの芝居熱も相当なもの
で、入管兵を送るにも除退兵を
迎えるにも村芝居を上演して祝った。
当時の役者として今にその名を残
している人々を挙げれば、渡辺三
次郎、平野庄市、丸山金吾、山内
孫三郎、渡辺音吉、木島観一など
である。特に丸山金吾の演じた、
「大野九大夫」(忠臣蔵)や木島

観一の「羽柴久義」(太閤記)、
また平野庄市、渡辺三次郎のコン
ビが演じた安倍貞任・宗任兄弟(奥州安達が原)などは本職にも劣らぬ名優ぶりだったという。またこれらの「名優」を育てた師匠「山手のいのさ」(本名和田清)の名も忘れてならない存在であった。(氏名敬称省略)

淡墨桜とその付近を訪ねて

野田茂

春の訪れと共に桜の花の便りが届くこのごろ、思い出したのが昨年の春根尾の淡墨桜を訪ねた事である。作家の宇野千代さんの淡墨桜をたたえる記念碑の除幕式が行われる新聞記事に今年の桜の満開は四月二十日ごろとあった、心は根尾に走った。時は四月十八日、口大間見の文化財役員とその家族を誘って一行が大和タクシーのご協力を得て午前七時出発、一路根尾に向かった。満開の桜の現地に到着したのが十時ごろ、先ず神社にお参りして、それから桜を觀賞しその根元で記念撮影をした。樹令一四〇〇余年とか。木の高さ一七、二メートル。幹周り九、一メー

トル。東西に二三、九メートル。南北に二一、二メートルに張った古木に咲いた満開の桜は実に見事で話に聞いた以上のものであった。また、桜の近くには幹が二つに割れて雑木が群生して見るも無残な桜の老木の有様を宇野さんは新聞や雑誌に書いたとある。またこれが老木の起死回生に大きな力となったと刻まれた記念碑もあった。桜に別れを告げて根尾断層の現地を訪れた。明治二十四年濃尾大震災の古傷の跡、断層を見る事が出来た。これは根尾の郷土資料館でその模型を見ていたので、この現地を見てあまりの物すごさに驚いた事である。途中能郷神社にお参

り、拝殿を借用して昼食を終る。それより三十余Kもある峠を越して揖斐郡徳山村に到着。ダム開発のためにすでに村の大半が家屋もこわされ荒地となっている状態を眺めて現地の人に同情する。奥地に残された数少ない人家を遠目に眺めながら川に添ってさがる。所々に塞ぎ止め用の横穴が目についた。さらに川を下ると横山ダムの見学もできた。再び峠を越して本巢郡へもどり、ミイラで有名な横蔵寺に参拝した。さらに天皇林公園へ立ち寄った。岐阜県植林祭の時天皇陛下お手植えの杉があまりにも大きく成長しているのに驚いた。この稿が一般に配布されるころにはあの桜が花を咲かせて観光客の眼を楽しませてくれるであろう。老木淡墨桜よ、いついつまでも元気で生き延びてくれ。

追憶

村井正蔵

私が特に印象に残っており、今は影形もなくなつた場所、それは松尾城跡の麓で、元藤古橋付近の景観です。再び原形に復する事の出来ないだけに、せめて本誌にでも残したいものと考えてみました。今より約四十余年前のこの場所には剣用水から落ちる小滝(約二メートル)があり、少し横に流れた処に、萱葺の水車小屋(三白搦き)、その際を曲りくねつた坂道が続き大間見川に架る元藤古橋に至る。この橋は太い丸木三本を岸から岸に渡し、中央には木の鳥居、西岸には丸木の屋次馬もありました。丸木三本の上に板を敷きつめて馬垣で板を押さえたものでした。この橋を渡り、くだら下ると間もなく藤古谷が川に流れこんでいる。この谷川を越すのに近世稀な飛び石で渡つたものです。これを渡るとまた坂道となり、ちょっとした峠をなしていました。これが四十年前の里道であり何百年も前からの通用路です。この原形は、将に一幅の山水画を見る様な風景だったものです。このような原形を語り合う事の出来る古老は別としても遠からず里人の心から消え失せることでしょう。

随想

我が里の通いし道は三尺余り飛び石渡りて行きも帰りも
○故郷の橋(一五か所)
川狭み我が故里は橋多く丸木の桁に板しきつめあり
○橋桁に係る屋次馬
丸木橋尋ね歩いた橋桁を支えられたよ屋次馬が
○藤古淵付近
登り下りくねり曲がりの里道を待つ人影や見えつかくれつ
○坂道
わが庵は城あと近くで坂道を背負いて運ぶ稲堆いなたい肥こまで
○橋桁の繫留縄
洪水の響きと果てなき雨の中薬持ちよりて四綱の組組む
○とび越え石
曲がり道峠をこえて配達夫自転車担ぎとび石を越ゆ



牧の伝説

牧 加藤 一男

牧の伝説を二つ三つ紹介しよう。

その一、水神社社の御手洗清水字「清水廻り」にある清水の一つで、近時水路の水源地であった。

水路に添って、いたる所から湧き出る清水と合わせて、約一町歩の水田を耕作する事ができた。昔の栗巢街道の道添にあり、道行く人々の憩いの場でもあったようである。

その昔、妙見宮に奉納された絵馬が夜な夜な抜けだし、この清水を飲みに来たといわれ、馬の足跡



がついていた踏石があったがほ場整備で埋まり、今は見当たらない。

その後、絵馬に杭と引綱を書き添えつないだったので、それ以来は抜け出す事はなかったという。

その二、千人塚

字田口谷下に三つ、字木戸口に一つあり、共に千人塚といわれている。応仁二年の斎藤藤隆との戦いや、天文九年の越前朝倉勢との戦いで、多くの戦死者を葬った塚といわれる。いちばん大きな塚は、鐘塚ともいわれ、木蛇寺の鐘も埋めてあると言ひ伝えられる。

その三、木戸口清水

字木戸口と字小牧田の界にあり、篠脇城の木戸口であったといわれ、この名がつけられたものと思われる。嘉吉元年の昔、大早魁が続き、里の人達が大変苦しんでいたとき、妙見宮の神主の娘千代が、神に祈りて歌を捧げた。

み仏に手向の阿伽も水無月の

神に祈りてくるすの里

そして、かたわらを薙刀の切先で突いた所から清水が湧きだし、里の人達を救ったといわれ、通称

薙刀清水といわれる由縁である。千代が祈った水神はその後、いつも水に難儀している木蛇次や近所の里人を救うため、現在地に祀られたのが水神社といわれる。

その四、三日坂

明建部落から東へ三百米余り、通称三日坂という所がある。昔は栗巢街道屈指の難所といわれた所である。天文九年八月、油坂から郡上に侵入した越前朝倉勢が二隊に分かれ、その一隊が白鳥、六ノ

里を経てこの地まで来た。待ち構えていた篠脇勢と激戦が交された。あまりの激戦に三日間血が流れていたとか、死骸で通れなかったといわれ、この地名になったという。坂の途中の洞谷を通称石仏洞という。洞の入口に高さ一メートル余りの自然石が二つ並んでいる。戦死者を弔らって建てられた石仏といわれ、洞の名になったのである。この石仏を夜中に一人で三

辺回り、拜んでいると、とてもきれいな娘さんが現われ、お茶を出してくれたいという昔の話。それほんと、さあてと。石仏から少し下った道路脇に、道路改良で今はずなくなったが、幽霊清水という湧き水があった。きれいな水であったが、昔からこの清水を飲んでると幽霊がでるといわれ、道行く人達も飲まなかったという。このほ

かに三日坂には、三メートル程の大人道が立っていたり、四メートルもある大蛇が通を塞いでいたとかで、真っ青になった人が、近く

の民家に飛びこんできた昔話もある。現在は街路灯がこうこうとしているが、それがかえって変った凄味を見せている所である。

文化財保護について

田 中 裕

大和町には国指定一、県指定一〇、町指定四一の文化財がある。

本年三月一三日付で、牧の滝日義一家の五葉松が町天然記念物に、剣の妙見清水が町史跡として指定された。また、四月三日付で大間見日光寺のしだれざくらが町天然記念物に指定された。それぞれ由緒あるもので、文化財の町大和町としてふさわしい文化財である。概要は次の通りである。

滝日義一家の五葉松
樹令推定五〇〇年といわれ、根元の周囲三m、目通り周囲二・一m、樹高六mという大木である。ヒメコマツともいふ。滝日家がこの地に住みついた時以来のものといわれている。

妙見清水
剣妙見にある清水で、東風行が郡上へ入部のとき、千葉家の氏神である妙見菩薩を下総国から勧請して、剣の阿千葉城の

南の地に社を建て、東氏の氏神とした。その社の傍らに清冽な清水が湧き出ており、真夏の干ばつ期にもほとんど量はかわらず、冷たくておいしい水である。本来ならば名水に指定されても遜色のないものである。

日光寺のしだれ桜
日光寺はもと周戸にあったが後、現在地藤代に建築された。この時に植えられたものといわれ、約一三〇年の樹齢である。

根元周囲三m、目通り周囲二・一m、樹高約一三mの美しいしだれざくらである。しだれざくらはヒガンザクラ系とヤマザクラ系があるので、開花時に再調査して固定したいと思っている。さて、文化財とは一体どういうものを指すのか、要約すると、一般的には人類の文化活動によって作り出された事物、事象で文化的価値のあるものをいうが、文化

洛北への旅

小池久江

財保護法（昭和二五年制定）文化財を保存し、その活用を図り、国民の文化的向上に資するとともに、世界文化の進歩上貢献することを目的として作られた法律）の対象とするものを指す場合が多い。

1, 有形の文化的所産で、日本にあって歴史上または芸術上価値の高いものおよび考古資料（有形文化財）

2, 無形の文化的所産で、日本にあって歴史上または芸術上価値の高いもの（無形文化財）

3, 日本国民の生活の推移の理解のため欠くことのできないもの（民俗資料）

4, 日本にあって歴史上または芸術上価値の高い遺跡、観賞上価値の高いもの。動物、植物、地質、鉱物で日本にあって学術上価値の高いもの（記念物）

ところで文化財に対する対応はどうであるか。「濃飛の文化財、第二六号には「岐阜県の埋蔵文化財行政は全国のピリから二番目である」と述べられている。ましてや一般の人々の関心たるやまことに淋しい限りである。実際私たちの生活に直接ひびかないものが多いので無理もないが、ただ考えなくてはならないことは、失ったら二度と得られないということである。かつてある地域のネジバナを紹介

介した。約二アールほどの場所にびっしりはえていたのが、三日もたたぬ間に全滅してしまった。昨年旧相生中の裏手の山のカタクリを名古屋ナンバーの車が数台のりつけて掘り取って行ったが何とかならんかという話があった。一人一人のモラルに待つしかないのが現状で、それと地域の人々がその自然を守るという意識と愛情がなくては守れない。

INAMIAという会があってその機関紙に「盗掘という愛好によつてそれらは全滅、とはヒマのなせる罪」。「全くの無知と独占欲によつての惨状」。「己が手中にしようという悪魔はこの国の自然教育の一大欠陥ながら、立身出世の入試には無益、無用」と痛烈なことばで自然破壊を責めている。この美しい日本の自然をどう守って行けばよいのか、考えたい。

俳句

有代 信吾

歳旦の階うかぶ大篝
雪随つる音深くして神の森
番所跡のつくばい石に冬鶉
雛一つ一つの由緒子に聞かす
花散りぬ弥勒菩薩の御手にも
飛びざまもみなそれぞれに夕蜩
萩こぼる鞍馬路ゆけば京言葉

車が京都市内を抜けると左右に田園風景、野菜畑がつづき、曲りくねった道がだんだん迫り京都市という言葉からすっかり離れて、道が間違ったのではないかと訝る程、京都は洛北鞍馬街道に入る。

長い山路、貴船口から道が二つに分かれ、右鞍馬、左が貴船と、私達は先に左へ入り、貴船川に添って木々がうっそうと茂る静寂の地を更に奥へ一潺湲たる川の流れと、谷が深くなるにつれて紅葉の色鮮やかに汀を染める。このあたり川床料理の、こじんまりとした旅館が並び、縁台に赤い毛氈を敷き、傘が張られて客を待つ、縁台に散る落葉を拾う風情も亦一枚の絵の様に美しく我々の目に映る。

車窓から、あの縁台にお弁当でも広げて……など、お腹の虫の精だろうか。車を下りて左右景色を楽しみながら、義経も歩いたかも知れない道を、みんなの顔が明るく、こんな山奥に「船」の字のつく神社があると不思議な気がしたが水の神様と聞けば山奥でも不思議

ではない。そう言えば牛道にも同じ名前の神社があったのを車の中から見た様な気がする。

ここ貴船神社は水を司る神として崇敬が厚く、千五百年前の鎮座と伝えられ、以前は奥の宮の地にあったが貴船川の氾濫によって移転されたとか。平安時代には和泉式部、宇治の橘姫も詣でたという。

傍らの船型石は漁業関係の信仰が厚いとか、船型石を一廻りして再び訪れることはないだろう神に賽銭が余分に投じられて、カメラの前に笑みをつくり、近くの茶店に一休みする。

この山奥で食事も出来ないだろうとの心配りか用意されたおにぎりがみんなに配られる。縁台に、人の背にわずかの木洩れ日に温かさを感じながら簡単な腹ごしらえをする。「俺はにぎりめしは嫌いやで、食ったことはない。」と不器用に現代のにぎりめしを、ガサガサしている老人に手を借して一緒に食む。「嫌いなものでも別嬪のそばで食やうまいわい。」と大笑いしながら温いおでんも運ばれ

て楽しい一刻をすごす。

貴船から鞍馬へ山越えの道もある様だったが、神社を後に貴船口まで戻り、右側へ鞍馬川に添って鞍馬寺に向う。細い谷に義経の話などどび交いもみちを愛でながら進むと、だんだん空が開けてくる。

その昔、牛若丸が僧正ヶ谷で天狗について剣術を学んだと云う伝説から、頭の中には杉木立の中の小さな寺を描いていたが、それは全く一変して、朱の色鮮やかな、立派な建物が立ち並び、目を見張らせた。古くから再度の火災で、現在の寺は明治から大正にかけて復興されたという、朱塗りの献燈、高い処のために数多い石段、坂道、山門から多宝塔まで歩いて三十分近くかかるという。私達は三分間のケープルを楽しんだ。左右草木に珍しいものは見かけなかったが束の間であった。広い庭内、いくつかの寺を拝み、覗き、もみぢ葉を拾い、ここから望む山また山の視界に静けさを感じ、ゆっくり下山する。みやげ店をのぞき、想像もしなかった美しい立派な寺を後に、ちよっぴり不似合いな感じを残して、さっきの道を戻る。

途中上加茂神社に古く落付いた美しさを見いで、いゝ気分ですり足を踏み、大樹に古を問い、珍らしい砂灘を見、陽の傾いた梢に風の

音を聞き、広々とした神社を後に車窓から加茂川に遊ぶ千鳥を心の中に歌い、今日の泊りであるく、に荘に向う。市内を通りすぎながら後の席から「岐阜で言やあ西柳ヶ

瀬、金沢でいゃあ香林坊という処かな」と聞えてくる。遊ぶ場所は何処にでもあった。今日一日鞍馬への始めての楽しい旅が終ろうとしている。

手遅れのくりごと

木 島 泉

文化財として残しておきたいと思うものが、次々と手遅れになっていることを、私は誠に残念に思っています。なぜ？ どうして？

文化財として残しておきたいと思うものが、次々と手遅れになっていることを、私は誠に残念に思っています。なぜ？ どうして？

もしかしら、こんなことを次々に提言する私って、出しゃばりなんでしょうか。肩をひそめられて

まだ以前に、こんなにひどくならないうちに、箕浦さんからそんなお話をくださったこともあるのだとか伺いました。でも、だめだったんだそうです。

まず、そのいくつかをあげてみましょうか。

その一は、福田の箕浦さんの所有だと思いますが、萱ぶきの家があります。大和町には、二軒しかない萱ぶきの一軒で屋根がくさって今にもつぶれそうです。先日見に行きましたが、もう限界ぎりぎりか、あるいは手のつけようもないとさえ思われます。あの家は、山田春台という、江戸時代の終りから明治へかけてのお医者様の家

から明治へかけてのお医者様の家

は現在残り少ない湿原植物が、もうほとんど埋められました。トキ草、コウホネ、カキラン、タヌキモなど、貴重な植物をはじめ、ハッチョウトンボの棲息地として、残しておきたい湿原でした。埋められて、工場などの敷地にした方が、値打ちがあるという話もききましたけれども、あそこは日照時間もわずかで、宅地としては不向

きとのこと。何とか残った土地だけでも助けていただけないのでしようか。これも一度は行政側との折衝があり、結局だめになり、以来双方ともにその気なし。

で、ふつうの桜と同じバラ科に属しますが、サクラ亜属ではありませんが、サクラ亜属といいたわっていただけでしょうか。いつても今更詮なきことながらこれは金銭的な問題よりも意識の問題として、考えるべきではないかと思うのです。

その三、宗祇ざくら。兼頼の手前の橋を渡らないで、古道の方へ少し登った所に、宗祇ざくらといわれてきた桜の木があります。

なぜ、それなのにサクラとよびならわしてきたのでしょうか。くりかえし書きますが、それは古今伝授にふかい関りがあると思えます。ウワミズザクラは、古名をハカといい、古事記の中にも、神前で占いをたてる神聖な木とされております。古今伝授の中には「秘」というところで、カニハという木がでてきます。このカニハはすなわちハハカであると記されております。

この木は、昨年枯れました。気がついたときは、いたみがひどくて、手のつけようもなかったのです。

但し、カニハについては諸説があり、私も奈良の万葉植物園の方から指導をうけましたが、はっきりしたことはわからないのです。ただいえることは、宗祇ざくらはウワミズザクラであったこと。この伝承は、深い意味をもつものとして考えなければならぬこと。できたなら、もっと研究していかなくてはならないテーマであること。そして、現物は枯死したけれども写真などで、残し、位置の確認をし、継ぐべき木を、植えておかななくてはならないということ。

それでも、一昨年は、西南の方へ一枝のびて、それが、花を咲かせ、実さえ成らせてくれました。

更には、せめて十年ほど前に、手

私は今でも、目頭が熱くなるほどに、その木を確認できたことに感動をします。宗祇ざくらって

幸い資料館もでき、小田原から東さんの資料が届くことも、まもなくであることは嬉しいことです。日の目をみないで、消えていく

大和町には、まだ、こうした問題がたくさん残されております。住民の生活は大切で、優先されることはもとより否みませんが、古い大切なものを喪っていくことは、もう決して帰ってくることはないだけに、何とかならないものかと、身を切られるおもしろいのです。

人間の歴史というものには、こつ然と今はじまったものではなく、長い長い足跡。それがつづいて今あることは、いうまでもありません。昔を知ることにより、よりよき現在がきざされていくのではないのでしょうか。

大和町には東氏の歴史があり、皆がそのことをとても誇りに思っています。でも、それは歴史の上だけでではなく、今も未来も、いろんな形で、大和町に関りをもっていかすにはおかないでしょう。

ものも、やはり文化財なのですけれど。こう訴えながら、私はやはり、自信をなくし、それでもいいわなくてはならない気分からられる自分が、いやになり、めんどくさくなってしまうのです。

「観光」と文化財

森 藤 幸

有代 信吾

篠脇山に東氏を懐う

篠脇山嶺松籟澄し

堅塁已に毀れ幾星霜

東氏の歌魂伝えて炳耀たり

現歌稿を繕きて塵事を忘る

吾が故里を謳う

春風飴蕩として人偕に和ぎ

長良の清流積翠を巡る

秋風嫋嫋として霊峰遙なり

爐頭独り酌んで地恩を飲ぶ

「暑い寒いも彼岸まで」といわれているが、彼岸を過ぎるともう桜だよりが新聞紙上に見えるようになって、春の息吹きは急速に近づきつゝあるようだ。

春ノというだけで何か心が浮き

立ち、春霞を思い満開の桜を想像すると、金のある無しにかゝらず、また年齢のことなど考えないで何処かへ飛んで行きたいような気になるのは私一人だけだろうか。

物と金が豊かな時代になって、その上春ともなれば世はまさに旅行ブームである。旅行といえは観光旅行、観光旅行と云えば観光バスに酒とカラオケ、そして温泉と神社佛閣参拝と一応型にはまっているようだ。それでは「観光」とは一体どういうことだろうか？物

好きにせんさくをして見ると、漢和辞典には「観」とは「見よ」と意識して見る、念を入れて見る、しらべて見る」とあって単純に見る、見物するより深い意味がある。「光」については「光る、かゞやく、照る、人の上にある、火

すぐれた文物制度」などとあり、

また「観光」については国語大辞典には、「他国他郷の景色、風物を見物すること、また風俗・制度等を視察すること」、広辞苑には「他の土地を視察すること、またその風光などを見物すること」

大百科辞典では「直接的に狭い意味では他国他地域の風景・風俗・文物を見たり体験すること、一般的に広い意味では楽しみを目的とする旅行一般のこと」と出ている。そして「観光」という言葉は、中

国の古典の「易経」の中にある「国の光を觀、王これを救い用う」から出ているとしている。

また少し古いけれども昭和四十五年（一九七〇）に総理府が調査したところによると「観光とは自然景観や名所旧跡を鑑賞見物したり、神社佛閣に参詣すること」と

あって、いづれにしても見物のために旅行することに間違いはないようだが、ただしかつめらしく考える必要はないにしても漫然とした物見遊山や、酒やカラオケだけの旅行とは一味違うのではないだろうか。

その点が大和町文化財保護協会の例年の旅行こそは本格的な観光旅行で他の手本だと自慢してもいいと思う。それはまず、旅行で何を得て来るか目的を定め、事前にその目的物について調査研究をし、バスの中でも講座を開いて勉強をするというものであるが、それでいて会員の皆さんは同志的な信頼と結合によってお互いのふれ合いが良いいのでとても楽しい旅行だからである。

今どこでも観光ブームに乗って地域経済活性化のために観光地づくりが進められている。そしてその観光の対象は文化財が多い。文化財と観光とは深い因縁があるらしい。

文化財は先人の尊い遺産でありこれは大事に後世に伝えて行かなければならない国民みんなの宝であるが、しかし宝の持ち腐れであってはならないと思う。文化財は活用してこそその意義があり、価値が出るのではないだろうか。差し支えない限り公開して国民に親しませ、それによって理解を深めさせ、そして国民全体で保護しなければならぬものだとの意識を高めさせることも大事なことで

ある。京都の一部寺院の古都保存協力税反対のための拝観停止は、

国民の要望を無視して国民の文化財の私有化であり死蔵である。

本町にも文化財は相当数ある。観光対象になるものも相当あると思われるが特に東氏遺跡など絶好のものではないだろうか。

本町の観光開発がまだ十分でないだけに、町当局が先頭に立って文化関係者、観光関係者が一丸となって町の文化財を再認識し、これを中心とした観光開発をして、町経済発展の一助ともするような事業を、事業が出来なければせめて運動でも進めることを真剣に考えるべきではないだろうか。

こうしたことは、当町の歴史が古く、従って文化の根も深い関係上町単独でなく、昔の山田の庄の立場に立って近隣町村を誘い合わせ、手を携えて推進すべきだと思う。

私達は郷土発展のために、観光ということを正しい意味で捉え、観光地づくりは文化の創造だという認識に立って、文化の高い町づくりに努めたいものである。



昭和六一年度

會員名簿

(氏名) (役名) (順序不同) (電話番号)

山下 運平 (顧問) 二四〇六
 山下 真一 三四九五
 河合 俊次 (理事) 二二四六
 畑中 康蔵 三五〇七
 畑中 定夫 二一六八
 小池 久江 (理事) 二五七六
 国枝 貞雄 二二九三
 池田 憲三 二二八二
 山下 ふみえ 三三二七
 日置 智夫 二七三〇
 加藤 正恵 二一〇七
 高橋 明 (理事) 二四八八
 日置 照郎 二〇七二
 加藤 文蔵 二八〇二
 佐藤 光一 三三〇一
 田中 裕 (常任理事) 二二〇〇
 高橋 義一 (常任理事) 三三九二
 青木 卦二 二二九二
 河合 恒 二二五八
 河合 芳英 二二〇四
 奥村千代子 二〇二二
 尾藤 房子 三三九三
 塚原富美子 四一四三
 大間見一 二二八五
 野田 直治 (会長) 二二八五
 野田 茂 (理事) 二二八五
 青木 新三 二四三六

村井 正蔵 (監事) 二二三三
 日置 繁 二二五四
 大野 隆成 二二三〇
 大野 紀子 二二三〇
 小池八重子 二二〇七
 日置 幸雄 二二七〇
 野田 英志 二二八五
 小野江運量 (理事) 三三七六
 清水 一作 三〇八六
 山下 直美 三九三八
 藤沢五三郎 三一六
 池田 充彦 三〇九〇
 小野江利久 二七〇二
 小野江 勉 二七二五
 池田 栄枝 二二八五
 池田 恒純 二八七九
 日置智恵子 三〇五二
 松井 直 (理事) 四〇八五
 松井 博 三五〇八
 坪井 政夫 四〇九二
 坪井 庄市 三五〇四
 古田 忠 四〇九〇
 井口 一男 四〇二〇
 佐藤 秀夫 四〇〇一
 松井 賢雄 三九九一
 藤代 順行 三〇六〇
 小間見一 三九六五
 田代 俊雄 (理事) 二五四七
 田中 吾一 三〇三七
 島崎 英二 三九三七
 平沢 勤 二四四一
 一方 場一 二四四一
 畑中 浄園 (副会長) 二四四一

畑中 真澄 二四四一
 石神 堯生 二四一三
 稲葉 春吉 二五〇三
 黒岩きくゑ 二四六〇
 桑田 和子 二四一九
 桑田 渥見 二四四六
 桑田 信夫 二四一八
 黒岩 弘巳 二四五八
 三島 秋男 二四六一
 井上 昌保 (理事) 二五二一
 井保 初枝 二七五八
 寛 明代 二五三二
 徳 永一 二〇二三
 木島 泉 (理事) 二〇二三
 木島 観一 二〇〇五
 鷺見 鈴子 二二八九
 鷺見 おと 三五九二
 直井すゝ江 二〇七七
 矢野原幸子 二二八九
 鷺見 ゆき 二〇六七
 田中まさを (理事) 二六一六
 山内喜久子 二六一〇
 水野 治 二五九一
 木島 洋女 二七三一
 土松 新逸 (理事) 二二二一
 遠藤 賢逸 二六九五
 渡辺 明夫 三五九〇
 木島 三郎 二三八二
 畑中 文枝 二〇五二
 一河 辺一 二〇二二
 清水美佐子 二〇一九
 清水 幸江 二〇一九

田中喜一郎 三四一〇
 尾藤 元子 二一四七
 岩谷ますの 三三六七
 横枕千代子 (理事) 二三八九
 前田 孝 二一〇一
 前田 鈴 三六六六
 白田とも子 二二五〇
 神 路一 二〇八三
 森 忠敬 (理事) 三三三〇
 白田 尊徳 三四六三
 和田 月男 (理事) 二一四
 山田 真人 二二七一
 羽生 清 二七〇五
 一牧 准一 (理事) 二七二九
 粟飯原高照 二六六二
 土松 康二 三九八〇
 日置 貞一 三六三六
 土松 貞二 三九八〇
 日置 昇 三九二二
 松森 益吉 三三〇六
 滝日 治 三九八一
 遠藤 光平 三三三七
 遠藤 米吉 三九二二
 斉藤 太門 二八七〇
 加藤 一男 (理事) 二七一〇
 清水 定 三六七四
 日置 一朗 二八九〇
 遠藤 周一 三九五〇
 田口 勇治 三四一七
 日置 元衛 三三八七
 粥川 溜 三三六〇
 本田 欽一 三三六〇

金子 徹 三四二六
 一栗 巢一 二二三六
 島崎 増造 (監事) 四〇四一
 増田 洋子 四〇三一
 寛 政之助 二七二八
 中山周左工門 (理事) 二二八四
 武田 信康 二七八八
 鷺見 豊夫 四〇二七
 野田 光誠 二七九五
 一古 道一 二七九五
 松井 弘雄 (理事) 三八六一
 細川 優 三七九一
 一名皿部一 二二〇一
 有代 信吾 (書記) 三三三〇
 有代 和夫 三三九一
 尾藤 由 二四八〇
 森下 正則 二六六七
 下広 茂一 二六四八
 一島 幸 (副会長) 二五五四
 森藤 雅毅 二七九一
 奥田 保次 二六八四
 此島 広 (顧問) 二四八〇
 須甲 甚一 二六四八
 山田 長次 (理事) 三六四八
 山田 昌枝 二五五九
 森 数雄 二七九一
 山田 良 二七二八
 山田 良一 二七二八
 松井 京二 三三八二
 直井 篤美 二六六二
 一白 鳥一 二一三三二
 玉井 秀夫 二一三三二

昭和六十二年 事業計画

一、会議

- 。総会の開催 四月二十五日
- 。役員会の開催
- 。四・六・九・一・三の各月及び臨時会
- 。常任委員会の開催 随時

二、研修および見学

- 。文化財に関する講演
- 。大和町の古城について
- 。文化財見学
- 。六月八日 関市方面
- 。十一月二～一三日（一泊二日）京都・奈良方面
- 。県本部研修会に参加
- 。その他臨時文化財見学
- 。湿地植物の移植

三、会報

- 。「文化財やまと」の発行
- 。B5版八ページ～一四ページ
- 。三〇〇部

昭和61年度決算報告

収入の部

項目	決算額
1, 前年度繰越金	49,577
2, 会費	288,000
3, 特別会費	875,000
4, 補助金	43,000
5, 諸収入	17,620
合計	1,273,197

支出の部

項目	決算額
1, 会議費	74,440
。総会費	62,680
。役員会費	11,760
2, 事業費	899,904
。研修費	859,904
。会報発行費	40,000
3, 事務局費	30,220
。消耗品費	150
。通信費	5,940
。旅費	8,580
。その他	15,550
4, 負担金	147,000
5, 予備費	
合計	1,151,564
差引残次年度へ繰越	121,633

昭和62年度予算計画

収入の部

項目	予算額
1, 前年度繰越金	121,633
2, 会費	288,000
3, 特別会費	970,000
4, 補助金	43,000
5, 諸収入	3,000
合計	1,425,633

支出の部

項目	予算額
1, 会議費	90,000
。総会費	50,000
。役員会費	40,000
2, 事業費	1,130,000
。研修費	970,000
。会報発行費	70,000
。湿地植物移植費	90,000
3, 事務局費	50,000
。消耗品費	10,000
。通信費	15,000
。旅費	10,000
。その他	15,000
4, 負担金	150,000
5, 予備費	5,633
合計	1,425,633

編集後記

◇ 今年は暖冬で過ごしやすい冬でしたが、三月は意外の寒波がおとずれて、風邪がはやりました。会員の皆様にはいかがでしたでしょうか。

◇ 会報第一二号をお届けします。原稿をおよせ下さった方に深謝します。私達の会報です。どんなに気軽にお投稿下さい。

◇ 今年六月には待望の文化財収蔵庫が完成すると聞いています。昔の人の生活用具が重要な民俗文化財としてより多く収納されるよう協力したいものです。

◇ 「つねに学び、文化の高い町をつくりましょう」という町民憲章の第一条を単なる標語に終わらせないようお互いに努力しましょう。

◇ 六月には関方面に、一月には洛東・奈良に文化財見学が計画されています。今からその日程をあけておいて、是非多数参加して下さい。
(畑中記)